

身近な自然



No. 3
夏号



モリアオガエルのいる本丸の池を観察。

都市部の貴重な自然と近年の変化をみる - 金沢城公園での自然観察会 -

「いしかわビオトープ交流会」が主催する自然観察会が、さる6月23日に金沢城公園を会場におこなわれました。これまで総会の開催にあわせて観察会を実施してきましたが、単独での開催としてははじめてのものでした。金沢市内の一部地域では大雨が降る中を駆けつけてくださった方もいました。

野外観察に先立って、長年にわたり金沢城の生物相の調査を続けてこられた大串龍一金沢大学名誉教授より、「金沢城址公園の自然環境」という題で金沢城公園の特徴や生息する動植物、近年の変化についてのレクチャーを受けました。

講演のなかで、金沢城公園の自然の特徴として、1) 都市緑地としての価値が高いこと、2) 人工緑地の一つの極であること、3) 北陸の低地自然の代表としての意味があること、4) 多様な動植物相が存在することなどが挙げられました。また、金大の移転やその後の整備、緑化フェアの開催などにより、近年、1) 樹木とくに低層植生の減少、2) 乾燥の進行、3) 動植物種類の減少、4) 小立野台

地の生物回廊の切断などの変化が起こっていることが説明されました。

開会時には小雨模様でしたが、その後天候が回復し、講演の後は観察会ということで、本丸跡地(旧金沢大学植物園)を中心に、新しくつくられた湿生園などを見て回りました。本丸跡地では、タブやスダジイの大木などこの森の歴史の深さを感じることができました。本丸の池や内堀ではモリアオガエルの鳴き声や卵塊が確認できました。また、オオルリの鳴き声やキセルガイなど山地性の種も確認されました。都市部であってもまとまった古い森が存在することにより、多くの野生生物が生息可能となっていることが推測されました。しかし一方で、いくつかのポイントで金大移転前の写真と現状を参加者全員で見比べたときには、森の景観が大きく変わってきていることを実感させられました。金沢城の森という都市の自然の重要性を正に評価し、守っていくことが今後さらに重要になってきていることについて、今回の観察会によってあらためて認識を深めることができました。



お盆が開けてもまだ夏の暑さが続いていた8月最後の日曜日、心配された雨も上がり、今年度第3回目の観察会が能登島で行われました。参加者は9名とやや少なめでしたが、能登地方での開催は初めてとあって、どのようなピオトープが観られるか、皆、はやる気持ちを抑えての始まりとなりました。

当日は能登島東部のピオトープ5箇所を見学しました。

最初は長崎地内にある源内さん造成のピオトープです。谷地田の休耕田の一番奥に作られた池は、造成後3年ほどたっています。水源は周囲の山からの水のみで、自然に発生したキクモを始めとし、ヤナギモ、イトモ、ホッスモ、オオアカウキクサ等20種類近くに及ぶ水生植物の1つ1つを時間をかけて観察できました。また、メダカをはじめとし、コオイムシ、ホツケミズムシ、タイコウチ、ハイロゲンゴロウなどレッドデータ種の昆虫類も多く、実際にタモ網を入れて捕獲しました。



谷地田のピオトープでの観察

2番目に案内して頂いたのは源内さんの家です。源内さんは周辺に生息している数種の水草を家の軒下で管理しており、当日は6ミリにも満たない可憐なヤナギスプタの花も見ることができました。

次は、能登島町の天然記念物に指定されているタブノキの大木の見学です。長崎地内出村家の庭先にあるタブノキは高さ約12m、幹回りは大人二人でも抱えきれないほどの大木で、タブノキの実がたくさん成っていました。植物に詳しい白井さんによると、タブノキの幹からでた樹液にはクワガタが多く集まるということでした。

次はコガマの生える休耕田の見学です。コガマはガマと同様、アシなどの植物とともに少し遷移のすすんだ休耕田に見られるもので、従来も稀な種ですが、近年著しく減少しているものです。しかしここでも特に保護されているわけではなく、人為による適切な手入れがされなければこの生育地も消失することになりかねない状況におかれていました。

最後に松島海岸を案内してもらいました。そこでは残念ながら時期を過ぎてしまったためイワタイゲキは観察できませんでしたが、種が波に乗って打ち上げられ、根付いた岩に花を咲かせる植物について源内さんに解説してもらい、自然のしくみを上手く生かして生きる植物の知恵に感心させられました。そして、すがすがしいほど澄んだ青い海に網を入れて魚をすくったり、波と小さな石によって作られた穴ボコのたくさんできた不思議な石を拾い集めたりして、なかなか去り難い時間を過ごしました。

観察会の後は、お待ちかねのバーベキューです。この日のために源内さんが海に潜って捕ってくれたサザエとシタザミ、たいへんめずらしいコリコリとしたホンダワラ類の海藻など、源内さんご夫婦で用意して下さった海と山の幸をきれいな海を横に見ながら、お腹一杯になるまで楽しみました。おいしいビールも片手に話は弾み、この会の今後のあり方など将来的なことにまで話は及び、とても有意義な、そして至福の時を過ごして観察会は閉会となりました。

尚、開催の準備から当日の案内までお世話を頂いた源内さんと奥様に、この場を借りて厚くお礼を申し上げたいと思います。(事務局 草光紀子)



古くから残されてきたタブノキ



お世話になった源内さんからのメッセージ

観察会には遠いところ皆さんにお集まり頂きまして、どうもありがとうございました。人数は少なかったのですが、観察会を終えてみて、稀少な自然や生きものに対する理解のある方々に、じっくり見てもらえたのでかえって良かったと思っています。特に、今回、小学生の翼くんにも参加してもらったことはうれしく、今後もピオトープをテーマにした場所を山と海岸に作るなどして、特にこれからの時代を担う子ども達に自然の素晴らしさに触れられる機会と場所を作っていきたいと考えてます。



当日は何力所か皆さんをご案内させて頂きましたが、私の作った池のピオトープには、少し問題点があることをちょっとここで述べさせて頂きたいと思います。この池には能登島で開発などによる生息地の消失に伴う稀少種を十数種移植してありますが、ご覧頂いたとおり池のほぼ全面に最初に2~3株入れたハスが覆ってしまい、全ての稀少な水草の生育にいいとはいえない環境になっています。また、様々な生育環境のところで生育する植物を1つの池で育てることは難しく、このままの状態では消えてしまう種も現れそうです。そのために一度水を抜いてハスをとったり、浅いところ深いところなどもう少し多様な環境をつくったりして池を作り直すことや、新たな田んぼと水路を作るも考えています。また、先日の観察会で初めて見つかったアメリカザリガニの駆除対策なども考えたいと思っています。

当日は半日という短い時間でしたので、ご案内させて頂いた自然のピオトープもほんのごく一部です。調査をするたびにレッドデータ種が見つかるという状態で、まだまだ調査も行き届いていませんが、ご案内できる場所だけでも1週間かけても回りきれないほどの場所があります。この観察会をきっかけに、地域の固有な自然を大切に思われている方にまた能登島の自然を見ていただいたり、自然の中で遊びながら貴重な自然を残していきたいと思います。

(源内 伸秀)

能登島観察会に参加して・・・

海を渡る風がこちよ快晴の日、源内さんの休耕田ピオトープへ続く道は、黄金色の稲穂がシオカラトンボの舞とアブラゼミのお囃子で出迎えてくれました。かつて子供の頃見ていたトンボやチョウチョの群れ、深く入り組んだ沢と自然のままの丘陵地。源内さんのこだわりは、たった数時間で、小生のあこがれになってしまいました。このままできてほしい能登島は、自然も食材も豊かなのでした。(櫻井英二)

ごめんなさい。「交流会in能登島」に参加したけれど、頭の中にあるのは「in能登島」だけ。とにかく素敵でした。金沢ホテルの会に参加して、ホテルの調査にシーズン中は明け暮れ、海を見るなどなんとも久しぶり。海だけでなく日中に自然と触れ合うなどまったく久しぶり。能登島で食べた能登島牛(?)はうまかった。能登島トンもうまかった。野菜も、スイカもうまかった。(家に持って帰って孫と食べた)ピールもうまかった。そして何よりも素敵な皆さんとの楽しい語らいが楽しかった。これからの交流会はすべて能登島で...というほど楽しいひと時であった。(お前は何をしに行ったんだ?)源内さんと奥さんありがとう。また.....よろしく。(何が...) (加藤明宏)

10数年ぶりに能登島へ渡って、いろいろな新しい施設ができる一方、昔からの自然環境が残っていることに、強い印象を受けた。その中でも見せて頂いた谷地田のピオトープは周りの里山とともに、北陸の自然の姿の良い見本と思った。できればこの自然の四季の変化を経験してみたい。

(大串龍一)

飛び入りの参加でしたが、能登島の自然にこだわり、守っていかうという源内さんの熱意には感動しました。能登島内の各地から池に集められた水生植物にはキクモ、オオアカウキクサ、ヤマトミクリ他の希少種も多く含まれており、それぞれがもともと自然にそこに生えていたかのように育っていました。地域固有の系統を絶滅から守るための避難地としてピオトープを活用することは、私たちにとっての重要な課題ですが、それをいち早く実践されているのを見て大いに参考になりました。

(白井伸和)

能登島は何ともいえないのどかさがありました。そして身近な自然を調べられている源内さんの話から、能登島の豊かさ、貴重さがより伝わってきました。盛り上がって楽しかったです。(川原奈苗)



都市の中のビオトープ、金沢城趾の自然

金沢の町の真ん中に盛り上がったように見える深い緑の森、金沢城趾の森は、その隣の兼六園の木々とともに、城下町金沢の街の象徴ともいえます。この城趾の森が全国どこにでもある都市公園とちがって、北陸の平地の昔からの自然の姿をとどめたいわば街の中のビオトープともいうべきものであることは、まだ充分には知られていません。またそれが自然に出来たものではなく、ここに北陸の低地の自然を復元しようとした試みの成果であることを、多くの人に理解して貰いたいと思います。城趾は人間によって山を削られ、堀や石垣と多くの建物によって原形をとどめないまでに造成されて、江戸時代を通じて政治の中心となり、多くの人々が住んで働いていた場所でしたが、ここ数十年の努力によって再び自然を取り戻してきたのです。

ここで今の金沢城公園の実態を説明しましょう。

金沢城趾は犀川と浅野川の扇状地に突き出した小立野台地の尾根の先端を切り離した丘陵を下降した人口の丘です。この切り離した所が兼六園との間にある百間堀で、その深さや幅をみても、400年以上前としてはかなりの大工事だったと言えます。もとの丘は今とは相当違って、深い谷筋が入った凹凸のあるものだったようですが、谷を埋め丘を削ってほぼ4段の広い平坦地を造ったのです。平坦地は本丸、二の丸、三の丸、新丸と大体南東から北西にむけて並んでいます。鶴の丸、玉泉院丸、藤右衛門丸等の少し高さが違う小さな平坦地がその周りにあります。

築城工事によりもとの丘陵の地形は大きく変わり、一部の大木を除いて植生もほとんど取り除かれて、一時は全く自然の形を残さない丘だったでしょう。しかしこの堀や石垣の建設で地形が複雑となり、長い年月のうちに様々な気候、土壌条件が形成され、多様な動植物が住める条件ができたと思われます。この上に草木が茂り、多種多様な動植物が繁殖できるようになったのは、ここ50年余りのことと思われます。戦後間もない時期に連合国の占領軍が写した空中写真によると、1945年(昭和20年)前後は、本丸一帯は大木の

点在する明るい草原状の環境であったようです。

金沢城趾の森が現在のような動植物相の豊かな、自然に近い状態になったのは比較的最近のことです。自然環境の復元には一定の年月を要しますが、その周辺に断片的にでも原生の動植物が残っておれば、その土地本来の生態系の復元は、非常に長い何千年といった歳月を要するものではありません。金沢城趾の森は原生の自然ではなくて、比較的近年に復元した二次的自然であると言えます。



石川橋から眺めた本丸の森

森の下生えが繁ってきた1980年代のはじめから90年にかけて、この本丸地区は野生動植物相がもっとも豊かであったと思われます。この時期に当時ここをキャンパスとしていた金沢大学の理学部、教育学部等の教員・学生によって金沢城趾とくに本丸植物園の動植物がいろいろな角度から調べられました。1980年代の調査結果は1989年(昭和64年)の北陸中日新聞の特集として70回にわたって連載されて、一般の人達に紹介されました。また私は大学移転の直前の1989年から94年にかけて本丸植物園の動物相を調査するとともに、それまでの動植物の調査結果をまとめて、種名の明らかになった動物1688種と植物約630種がここに住んでいたことを記録しました。標本はあるが種名がまだ判っていないものを含めて、1990年代の始めにはここに動物約3000種、植物約700種が分布していたと推定されます。各地の動植物調査でも、10ヘクタール以下で3000種を越える動植物相の



記録は有りません。それを考えると金沢城址の本丸（東の丸を含む）だけで約4ヘクタールの森や草原に分布する動植物の種類数は、非常に多いものです。言い換えればこの1990年代始めの金沢城址の本丸の森は、日本でも珍しい生物の種類が多い生態系であったといえるでしょう。

このような高い生物多様性を持った生態系が金沢の街の真ん中でできていた理由は、ここを管理していた大学に十分な予算がなかったために、壊れた道や石垣の補修や、枯れ木の除去などの最低限の手入れしかできなかったということが、自然の復元を助けたという皮肉な結果となっただけでなく、かつての大学植物園の管理方針があります。私達は造園や植栽に手をかけてきれいな庭園を造るのではなく、ここになるべく北陸の低地の元の自然を復元しようとしてきました。当時、この大学理学部附属植物園では、ここを兼六園と対照的な園地にすることを目標としていました。つまり兼六園を人工の極致の庭園とすれば、この本丸は自然の極致の森として対比できるようにしたいと思っていたのです。植物園が設置された当初はここに研究用の各種の植物を植えたり、動物を放したりしたようですが、1970年代から上のような方針が固まってきて、大学移転の時期まで継続しました。それ以前に導入された外来の動植物もありますが、この30年間の自然の復元という管理方針は、ビオトープの考え方を先取りしていたと言ってもいいでしょう。



本丸の森にすむアカネズミが蓄えたオニグルミの実

金沢城址が、賑やかな街の中にあるにもかかわらず豊かな野生動植物相を保ってきた理由の一つには、金沢の街の地形があります。街を貫く犀川と浅野川という2つの川に挟まれた小立野台地の両側には、近頃まで急な斜面に生えた森が、金沢城址と白山山系の山々を結んでいました。これが野生の動植物の通路として、山々と町中の森をつないでいたのです。近頃よく生物回廊などといって野生の動植物の通り道の重要性が言われますが、小立野台地両側の崖地の緑は、金沢市内と自然の山を結ぶ大切な動植物の回廊だったのです。最近10年ほどの間にこの大切な回廊に自動車道路や建物が出来て、市街地と郊外の自然の山野を断ち切ってしまったのは残念なことです。

この金沢城址のもう一つ重要な点は、動植物を中心として地域の自然環境に関するデータが、30年余りにわたって蓄積されていることです。人手の不足や様々な困難のために不十分ではありますが、動植物の種類相やその移り変わりが、これほど詳しく判っている場所は、全国的にみても数少ないことでしょう。こうしたデータの蓄積は、それ自体が大きな価値を持っていて、私達の大切な文化遺産となります。

大学が角間に移転して金沢城址が県の管理に移ってから、特に平成12年以降、ここは県の公園（始めは金沢城址公園、現在は金沢城公園）として大きく変わってきました。平成13年の秋には全国都市緑化フェアの会場として、また今年、平成14年3月から15年1月にかけて加賀百万石博覧会の会場として菱櫓や五十間長屋をはじめ新しい建築物が建てられ、二の丸、三の丸、新丸などかつて大学の建物が建っていた場所の景観は一変しただけでなく、本丸の森やその周辺の自然の姿は急速に変化が進んでいます。それでもここにはまだかなりの自然の環境と野生動植物が残っています。これをどのように保全し、街の人達の生活と共存出来るようにするかが、これからの問題でしょう。

（交流会会員 大串 龍一）



代々受け継がれる人の幸せと健康を願って - つばた健やかなの郷 -

河北郡津幡町、丘陵地の谷間に「つばたすこやかなの郷」があります。ここは石川県森林公園の一角で平成12年までヨシ原や藪地となっていました。雑木林を含めた荒れ地を有効に活用しようと、地元に住む数十名の人たちが県の許可を得て、活動をはじめました。



活動は平成12年の春からおこなわれています。「自然農法による水田や果樹園、花園などを整備し、健康な食と安らぎをつくりだしたい。自然と調和した池をつくり、子どもたちの自然体験をかねたビオトープを造成したい。雑木林に散策路を設けて自然解説ができるよう環境教育の場として機能させたい。」会が当初から抱かれています。町や県などの行政機関や造園土木の専門の方、生物分野の専門の人たち、いろいろな立場の人が関わって場が展開され、自然の美しさを引き出すようにして丁寧に整備されています。

これまでに、花卉栽培園、キュウイなどの果樹園、



じゃがいもやピーマンなどの野菜畑、砂利や石の敷かれた通路、郷の入り口付近の広場には洋風花壇ができました。

奥にはため池があり、そこから水を引いている水路にも工夫がされています。ひとつは細くて浅い素堀の水路。もうひとつは深く掘り下げて木で土留めされており、底には小石が敷かれています。どちらも水生生物が生息できるよう配慮されており、水路と水路、水路と池、水路と田んぼがつながっています。また小規模なビオトープ池が2つつくられました。土地の条件にあった池をつくるために、場所や大きさ、植栽の相談を生物を専門としている先生に相談して始められました。ひとつは雑木林と接した場所にある浅い池で、エゴノキの枝が低く水面にかぶさり、日陰で湿地となっていました。そしてその池より一段下がったところにもうひとつの池があり、こちらはやや大

きく、日本庭園風になっています。ここには平成13年5月に笠野小学校5,6年生がミズアオイの苗を植栽しました。また広場より一段下側には会を代表している折橋さんの水田があります。以前から無農薬農法で米作りが行われており、健やかなの郷として共に活用されています。平成13年度は笠野小学校の子どもたちの手で米作りがおこなわれました。最初は嫌がる子どももいたようですが、裸足で泥の田んぼの中に入り、みんなで手植えする作業は初めての体験でかなり盛り上がったようです。その後、稲刈りからはざ干しの作業を終えて、学校のフェスティバルでおにぎりがつくられました。

健やかなの郷では、みんなが求めるものやつくりたいものを、手作りで試行錯誤しながら創りだしています。健康な食を得るために薬は使わない、自然の生きものを生かすためにも農薬や化学肥料はいっさい使用されておりません。一部の土手では、関係者の好意によ



って緑化シートが敷かれたが、外来の草であることや薬を含んでい

ること、また土手の自然も大切にしたいとして、緑化シートは取り外されました。その後、草刈りが念入りにおこなわれている土手には苔がたくさん生え、山野草が定着してきています。

また、手作りで作業は大変な労力を必要とし、自然の状態を活かして土地を造成することは天災の危険がありますが、そういった面にも対策を立てながら取り組まれています。しかし今年の7月の台風6,7号による豪雨で古くからあるため池の堤が撤回してしまいました。明け方で近くに誰もいなかったことから、幸い事故に遭う人はいませんでしたが、土砂が大量に流れたことで湿地状の池やハーブ園は全て埋まってしまうなど、時間をかけてつくられた場所の約半分が壊れてしまいました。その後の活動で復興されつつあります。

「みんなが心身ともに健康になれる憩いの場を創りだしたい。」多くの人にきてもらうことを会のみなさんが願っています。ぜひ、つばた健やかなの郷を訪れてみてください。(事務局 川原奈苗)



交流会メンバーの自己紹介コーナー



ビオトープと私

東京大学農学生命科学研究科生物多様性科学研究室 西原昇吾

私は現在、シャープゲンゴロウモドキという体長30mmほどの大型ゲンゴロウ類の生態、保全について研究しています。このように水生生物を扱うことになった原点は何だったのでしょうか。今、振り返るに、常に身の回りにビオトープがあり、それぞれが現在の私に影響を与えていたようです。

幼い頃には、親戚とザリガニ釣りやカブトムシ、クワガタムシ採集を行っていました。小学校では理科室の前に小さなコンクリートの池があり、多くのメダカやクロスジギンヤンマのヤゴを観察出来ました。また、自然教室では、人工の湿地でミズカマキリなどを採集出来ました。一方、その周囲にはメダカも生息する水田、用水路、ため池があり、多様な環境の中で様々な水生生物を採集することが出来ました。中学、高校でも学校内に雑木林があり、朽木割りなどが出来ました。家の近所にも雑木林や谷戸が残存し、自然の中で遊ぶのに不自由ませんでした。そこは、今では横浜市舞岡公園として整備されていますが、当時はゲンジボタル、ホトケドジョウ、タイコウチなど今では数少なくなった生き物が多く生息する良好な水辺ビオトープでした。こうした楽しい原体験をもとに、水生生物との関わりが続いています。

金沢では、城内キャンパス最後の学年でしたが、城内でモリアオガエルを見たり、百間堀でイタチを見たりするなど、都市の中心部とは思えない、驚きの連続でした。さらに、角間ではすぐ裏の水田脇の用水路でゲンゴロウが泳いでおり、これまた驚きでした。市街地の近くにゲンゴロウが生息するのは、今では全国的に珍しいことです。これらの体験から石川の自然に対する愛着が生じ、今でもフィールドに通っている次第です。

また、「ビオトープ」との出会いは、1993年に東大農学部でのビオトープ勉強会に参加していた頃で



シャープゲンゴロウモドキの幼生。共食いをしている。

した。その際に翻訳していたものが、ビオトープの基礎知識(ヨーゼフ・ブラーブ著 日本生態系協会 1997)として出版



されています。これは、ビオトープ事業が展開されるに伴い、ビオトープという概念が正しく理解されないうちに行なわれるものも増えてきたために、ドイツにおけるビオトープの本来の意味を紹介する必要があるという目的で出版されたものです。

石川県のように身近な自然が多く残っている地域では、良好な生息地が破壊され、かわりに「ビオトープ」と称する人工の箱庭がつくられるということは不可解なことです。学校ビオトープは確かに環境教育に役立ち、子供たちが自然とふれあい、地域に目を向ける契機となるという意味はあるでしょうが、結局、ビオトープを基にして、周辺の自然がどれほど理解されるかが課題であると思います。例えば農村ビオトープは、二次的自然ではありますが、現在のように本来のビオトープが失われた現在では貴重な生息環境です。各ビオトープでの体験が今の私につながっていることから、子供たちにぜひいろいろな環境を見てほしいと思います。

最後に、現在の研究対象であるシャープゲンゴロウモドキについて。本種は、1960年の石川県内浦町の記録を最後に全国的に絶滅したと思われていましたが、1984年に千葉県で再発見されました。現在は環境省レッドデータブックで絶滅危惧 類に指定されていますが、国内では石川県内に最も多くの生息地が残されており、金沢、能登の浅く、泥深い湿地、池沼や廃田、休耕田に生息しています。しかし、最大の生息地であった能登空港周辺、七尾のLPガス基地周辺は工事により改変され、また、休耕田、廃田も乾燥化が進行し、絶滅の恐れが高まってきました。そこで、あらためて本種の生態について研究することとなりました。

今後は、水生生物を中心とした生態系保全の研究を行ない、広く人間と環境の関わりについて考えてゆこうと思っています。

第3回ピオトープ観察会のお知らせ

きらめく水辺と草原の風～河北潟の自然観察～

河北潟には貴重な水辺の自然が残っています。潟にはコイやフナが、水路には水草やメダカ、水際のヨシ原にはバンやヨシゴイが潜んでいます。この夏にはカヤネズミの生息も確認されました。

一方、河北潟には広い干拓地があります。ここは日本でも有数の草原性の野鳥の生息地として知られています。

金腐川河口に新しくつくられた、「こなん水辺公園」は、模索しながらも新しい公園の姿を提案しています。

河北潟は、ピオトープ交流会の観察会を開くには絶好の場所です。10月はさまざまなイベントと重なる忙しい時期ですが、お時間のご都合がつく方は、是非このすばらしい河北潟での自然観察会にご参加ください。

会場までの交通が不便ですので、お車をお持ちでない方は、事務局までご一報ください。

日 時 2002年10月27日(日)午前9:00 - 12:00
集合場所 金沢市「こなん水辺公園」

(金沢市大浦町; 競馬場の西側です)

内 容 「こなん水辺公園」をまわった後、金腐川河口や大浦町の水田周辺を探索する予定です。

「金沢市周辺の身近な自然マップ」づくり

前回4月の総会の際に、全労済よりの助成金への応募について承諾が得られましたので、応募しましたところ30万円の助成を受けられることとなりました。そこで、金沢市と近郊の身近な自然を紹介するパンフレット「(仮)金沢市周辺の身近な自然マップ」ヲつくりたいと思います。このパンフレットをつくる目的は、見失われがちな身近な自然にスポットを当て、失われがちな身近な自然の保全に役立てることです。また、石川県民のピオトープについての理解を深めることにもつなげていきたいと思っています。

今回は、特に里山や平野部の農耕地の開発が進んでいる金沢市近郊に焦点を当てる予定ですが、活動がうまくいけば、今後、加賀地域や能登地域の自然を紹介するパンフレットをつくることも展望していきたいと思っています。

すでに、9月24日に有志による予備会議を開催

して、できるだけ多くの方にこの活動に参加いただくため、今回身近な自然についてのアンケートを募集することになりました。ぜひ、みなさんの自慢の「身近な自然」の情報をお寄せください。パンフレットは4月頃の完成を目指しています。

(事務局 高橋 久)

編集後記

編集後記の場をお借りして、ちょっとしたニュースをお伝えしたいと思います。最近、河北潟湖でカヤネズミの生息を確認しました。

カヤネズミは日本に生息するネズミの中で一番小さく、ヨシやススキなどイネ科やカヤツリグサ科の草が生えているところに棲んでいます。これらの草を細く裂いて球状の巣をつくり、草の間に巣をかけます。このような草が生える河川や湖沼、農地は、圃場整備や水辺のコンクリート化、除草剤が使用されてきたため、カヤネズミの生息環境は全国的に減少しています。

しかし、石川県での生息状況はまだよく調べられておらず、県のレッドリストでは情報不足の種として扱われています。河北潟には草地が広がっているために、カヤネズミが生息している可能性は指摘されていましたが、これまでに確認された報告はありませんでした。

このたび、福井県敦賀市の中池見湿地でカヤネズミの調査をしている三谷 功さんの協力を得て、河北潟で調査を実施することができました。球状の巣をさがしてカヤネズミが存在しているかを調べます。承水路や排水路、金腐川の河口付近などカヤネズミの好む草が生えている場所を選び踏査をおこなったところ、カヤネズミの巣が金腐川の河口付近の1カ所で確認されました。河北潟でははじめての確認となりますが、ほかの場所にもいるのかなど、今後調べていきたいと思っています。球状の巣をみかけたら、ぜひ教えてください。

(事務局 川原奈苗)

「身近な自然」 No.3 夏号

2002年9月28日

発行所 いしかわピオトープ交流会

Email:biotopi@hotmail.com

事務局:〒920-0051 金沢市二口町八58

Tel.076-265-3323 Fax.076-265-3435

北陸水生生物研究センター 気付

